



三春中学校だより

第 54 号

発行日 平成30年12月21日

発行所 三春町立三春中学校

電話 0247-62-2181 F A X 0247-62-6978

E-mail miharu-j@fcs.ed.jp

【教育目標】『三春に暮らす生徒一人ひとりに、将来に対して喜びと生きがいのある人生を主体的に創造する力を育み、地域に信頼され、ひいては、国際社会に貢献できる人材を育てる』

【放射線学習のまとめをしました！ ～中学生らしい冷静で、根拠をもったまとめでした。～】

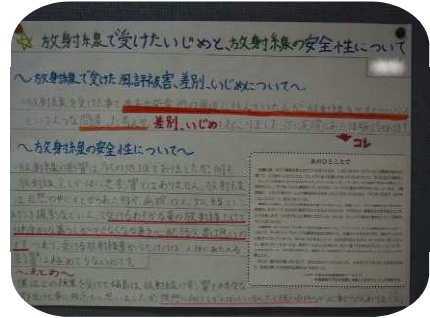
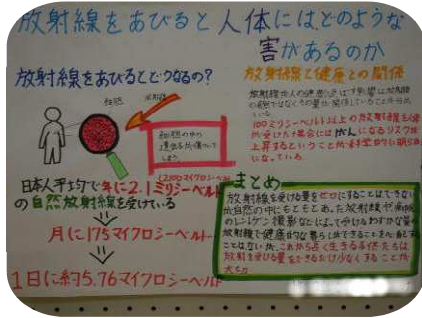
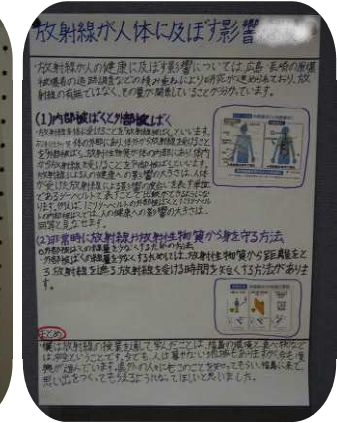
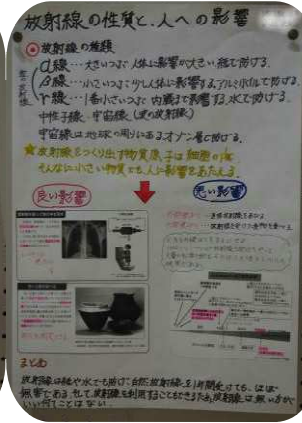
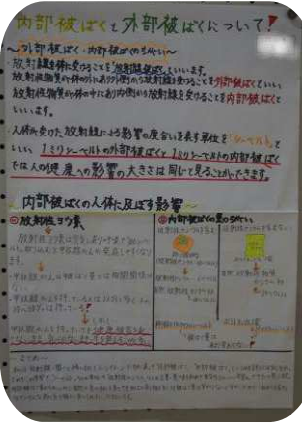
本校は、放射線学習を教育課程の中に入れ、取り組んでいます。原発事故後の福島県に生きる者として、真摯に放射線に向き合っていこうというねらいのものと取り組みです。

第1学年の理科においては、外部より講師をお迎えし、そのまとめとして、3階の1年生ホールには、移動式パネルに子どもたちがこの1年間で学んだ放射線学習のまとめが掲示されました。

一つ一つを拝見すると、放射線の人体への影響、内部被曝と外部被曝、風評被害や被ばくを理由にしたいじめ問題など、さまざまな視点から放射線について見つめ、学び、考えを深めていました。

会津学習や三春学習の学習の成果を発揮し、色ペンや図を効果的に使い、問題点を明確にすると共に、特筆すべきは、これ

からどのように放射線と付き合っていくのかについてきちんとまとめられているところです。正しい知識に基づく適切な判断、必要以上に怖がらず、かといって楽観視せず、これからの福島県に生きる者として、現実を冷静に見つめ、行動していくこと、そして、福島は今を発信していくことに真剣に取り組んだ子どもたちでした。



【田村地区中教研国語部の文集『田村の窓』の表紙を本校生徒の作品が飾りました！】

一昨日、私の手元に、田村地区中教研国語部編纂の文集『田村の窓』が届きました。その第59号の文集『田村の窓』の表紙を、本校3年生の女子、美術部部长さんの作品が飾っていました。絵の中央に石造りの階段を配し、両側は蔵づくりの建物でしょうか、三春の町並みを見事に描いた作品です。

文集『田村の窓』は、遡るところ、昭和34年度に創刊され、あの東日本大震災も乗り越え、現在まで営々と続いています。田村地区の中学校に学ぶ中学生の、その時、その時代のさまざまな作品を掲載した文集で、ある意味、田村地区の中学生の歴史といってもいい作品であります。

田村地区中教研国語部には、さらに歴史と伝統にあふれた取り組みがあります。それは、本年度、第67回を数える田村地区書写コンクールです。昭和26年から始められたコンクールで、あの東日本大震災やその後の原発事故に伴う混乱期にあつて、小学校の同様のコンクールがとりやめられたのに対し、当時の田村地区中教研国語部の先生方の情熱と決意で、中止することなく続けられたというコンクールです。

さて、文集『田村の窓』の表紙を飾るといふ事は、中学校再編後6年目の三春中学校にとって、その歴史に新たな1ページを加えた大きな出来事と断言していいと思います。本年度、美術部長として部活動を継続し、部員をまとめることはたいへんでした。そんな中で、見事な作品を作成し、国語部に提供いただきありがとうございます。大切にさせていただきます。



【おいしい給食をありがとうございました！ ～たくさんの笑顔がそこにはありました。～】

ランチルームで、2年生の給食風景を見学しました。ランチルームで子どもたちの到着を待っていると、まず、係の生徒がやってきて、教室で食べる学級の給食担当は、給食の一式の載ったワゴンを押して教室へと移動、ランチルーム食事学級の係は、白い帽子と配膳エプロンを身につけ、配膳台の

水拭きの後、主食、主菜、副菜、汁物の入れ物を配膳台の上に並べ、各担当に分かれて食器によそい、一般生徒の到着を待ちます。到着した一般の生徒は、お盆から順次配膳台の上の料理を受け取り、会食の長テーブルに移動、全員が着席したところで、「いただきます。」という順序です。

作りたての熱々を、みんなと一緒にいただける楽しさがランチルームにあふれていました。

そんな楽しみな給食を毎日作ってくださった調理員のみなさん、栄養のバランスを考え、地場産品の活用にも積極的に取り組んでくださった栄養教諭の齋藤満子先生にも心より感謝いたします。ありがとうございます。来年も楽しみにしています。



【認め、励ます、これからも！ ～種類が増え、すてきな器に載ったお寿司も。～】

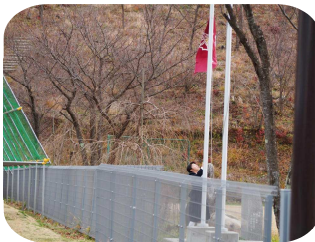
“私にはこれがある”と言えるものを自分の中に見つけようとスタートした平成30年度。それを『命の輝き』と表現してきました。これまで、学校では、子どもたちの学びの成果を積極的に取り上げることで、『命の輝き』（“私にはこれがある”と言えるもの）を一つでも多く子どもたちの中に見つけてあげようと取り組んでいます。階段踊り場の豊富なすしの数々もその一つです。

これまでを振り返り、学校生活における『命の輝き』を探して、“これだな”と見つけたものをご紹介します。

毎朝、生徒会役員の生徒が校旗を掲揚しました。ホームベースに行き、学習用具を整えて学びの場まで自分で移動しました。校長室掃除はいつも実に丁寧でした。雑巾がきちんと掛けてありました。靴のかかどがそろっていました。話す相手に体をむけて聞いていました。諸活動に全力で取り組みました。要田駅清掃で地域のために貢献しました。



種類が豊富に



毎朝、欠かさず



HBから自分で



心を込めて



きちんと掛けて



かかどをそろえて



体をむけて



夢中で全力



地域のために

いかがでしたでしょうか。すべてが子どもたちのがんばりであります。「当たり前のことじゃないの。」と思われるかもしれませんが、当たり前が当たり前でできることこそすばらしいと考えます。“当たり前”とは、社会で一般的に言われていることです。上のことができる子どもたちは、ご家庭で、学校で、社会で、そういう“当たり前”のことを教えてもらい、学んできているという証拠です。社会の中で自己存在感を感じつつ、必要とされながら諸活動にあたる素養を身につけてきているということです。これは、もうすぐ社会に巣立つ子どもたちにとってとても大切なことです。新年も、『命の輝き』～共に、ひたむきに、そして、こころ豊かに～三春中学校で生活していきます。